〔研究ノート〕

オランダ東インド会社（VOC）の投資者・運営者に関する研究
移住フランドル人のオランダ大航海時代への貢献という視点　（前）

小川　秀樹

Abstract

The Dutch East India Company (VOC), founded in 1602 as allegedly the first publicly traded joint-stock company in the world, seems to have been researched thoroughly already for centuries except in one aspect who administered the Company's business at home and in East India (e.g., Jakarta and Nagasaki). That question may be quite reasonably raised by the curious fact that, for example, the Rotterdam company, which was one of precursors of the VOC and dispatched the Dutch ship "Liefde" to Japan for the first time in 1600, was financed largely by Johan van der Veecken originally from Mechelen, Flanders. In addition, its fleet was commanded by Jacques Mahu originally from Saint-Omer, French Flanders. What was the reason for such a background of this "Dutch" voyage piloted by the first Englishman in Japan, William Adams (Miura Anjin)?

This paper seeks to research extensively into the ancestry of investors, governors, admirals, etc. of the VOC, and, as a result, made clear that it was indeed a primarily Flemish (or Jewish) venture, and that most of the Dutch senior officers based at home and officers posted abroad in Jakarta or Japan as Chief Factors (merchants) were of Flemish descent. This research result may eventually & ultimately answer yet another question related to the Euro-Japanese historical relationship, such as the long-lasting controversy on the so-called seclusion (Sakoku), if any, during the Edo period.

Keyword：
オランダ VOC、大航海時代、日欧交流史、フランドル史、人口移動・移民、平戸・出島

前編目次

1. はじめに　本研究の視点
2. 本研究分野の先行研究について
3. 本研究の手法について
4. オランダとイギリスの東インド会社
5. オランダの三人のパイオニアたち　―ポンプ・リンスホーテン・ハウトマン
6. 先駆会社「遠国会社」を作った人々
7. 先駆会社「旧会社」を作った人々
8. 新ブラバント会社　―アムステルダム商人のもう一つの源流
9. ゼーラントのミッデルブルフ会社
10. リーフデ号を派遣したロッテルダム会社など
11. VOC 発足後　総本山のアムステルダム・カーメル
12. 権限絶大なる船団司令官の出自
13. 幾人かの有名な船団司令官の事例（以上前編）

1. はじめに　本研究の視点

16 世紀のポルトガル・スペインによる、いわゆる大航海時代を経て、17 世紀に入るとオランダ、次いでイギリスの参入による大航海時代へと主人公は移り変わっていく。その際、上記イベリア勢の大航海時代を経済面で支えたのが、スペイン国王でもあったカール五世・フェリペ二世統治下のフランドル、とりわけ絶頂期のアントワープである(1)。さらに引き

（1） スペイン経済の中心地たるアンダルシア南部において商品生産拠点が発展せず、植民地市場への商品供給をイギリス、フランドル、フランス等、他のヨーロッパ諸国に頼ったとされる（ベイリン、47 頁）。とりわけ新大陸の金銀は、商品の集配地で金融の中心市アントワープに還流した。ポルトガルについてもまったく同様で、大砲の生産なども国内及びゴア等での生産では追い付かず、フランドル、スウェーデンなどからの輸入に頼ったとされる（高橋、81 頁）。

続きオランダ・イギリスの海外進出を陰で演出したのも、宗教改革やオランダ独立戦争の主要な当事者であったフランドル人であるが(2)、しかし、そうした側面が注目され重視されることはほとんどない。しかもその視点こそが、例えば今でも関心を集め続けるオランダの急激な繁栄と衰退の理由や、その後のイギリス海外進出の成功の理由、また米国をはじめとするプロテスタント諸国による現在に至る覇権獲得の背景を説明し、さらに日本については、江戸時代のいわゆる「鎖国」の有無・是非を巡る論争に一石を投じることにもなる可能性をも含むことまで広く認識されているとは決して言い難い。

こうして 16 世紀の主役であったイベリアのカトリック勢から 17 世紀の主役である英蘭のプロテスタント勢への主役交代の蝶つがい役ともなった地域がまさにフランドルに他ならない。しかしそれはフランドルという国土や地域自体の役割というより、むしろスペインのレコンキスタ後におけるユダヤ系のポルトガル経由でのフランドル移住や、宗教革命やオランダ

（2） 宗教改革を担った人物としてはカルヴァンは後発であり、先人の築いた下地を利用して、フランスにおいてはパリ周辺を除き、ノルマンディーやピカルディ、さらに南西部、東部を含む地方で勢力が大いに伸長した。カルヴァンがフランドルから至近のノワイヨン出身のピカルディ人であったこともあり（ブルゴーニュ公国の版図内）、またワロン人であるギ・ドブレー（Guido de Bray または Guy de Bres）の「ベルギー信仰告白」（Belgic Confession）もあり、「カルヴァン主義は、ネーデルラントにおいて、また別の大勝利をおさめていた」（レオナール、92 頁）。また北部ネーデルラントへはむしろイギリス経由でカルヴァン主義が広まったともいう（上掲書、33 頁）。カルヴァン主義が外来の「エミグレの宗教」であるとされるイギリスにおいては（大木、68 頁）、下記脚注 4 にある通り、フランドル系住民の存在がカルヴァン派の伸長に寄与した。なお Calvin という姓も、元々の姓 Cauvin もフランドルの姓と見做され、母（Lefranc 姓）はノール県カンブレー出身のユダヤ系と思われる。この点については拙稿「帰国しなかった理由を巡る一試論」（113 頁）を参照。また結果的にオランダ（ユトレヒト同盟側）のみが独立したことから一般には「オランダ独立戦争」と言われるが、本来は、フランドルの諸都市を含め、より広範囲の地域が独立を欲したという意味で「ネーデルラント独立戦争」であろうし、戦争の発火点も（フランドル人マッテ（Matte）の説教に触発されたフレンチ・フランドルの教会での聖像破壊運動）、主要な登場人物も（例えばそれぞれ乞食党、海の乞食のリーダーたるファン・ブレーデローデ、ドルハンなど）、アントワープ、オステンドの攻防を含め、主要な戦いは概ねフランドル側である。

独立戦争の過程におけるカルヴァン主義者たちのオランダ・イギリス等の周辺国への大量移住を含めた、フランドルという国土を舞台に繰り広げられた大規模な人の移動によりもたらされたものである。その視点を抜きに近世初期の時代と世界の実態を把握することは出来ないだろう。

もっとも近現代国際社会の成立過程そのものを問うに等しいそのテーマは本稿で扱うにはあまりに壮大過ぎるので、ここでは以上述べてきたことの全てを凝縮した中心的課題の一つであろうと思われるオランダ東インド会社（以下、VOC と略称する）を取り上げ、しかも近世初期のヨーロッパにおける人の移動との関係で、VOC の設立・運営主体の人的側面に限って少し詳しく分析してみたい。

なお本稿においては、ネーデルラント（ほぼ現在のベネルクス三国）として全体を表現する場合以外は、その北ネーデルラントをオランダ、南ネーデルラントをフランドル（英語のフランダース）と言い分けるものとする。その場合のフランドルはごく大まかに言えば、今のベルギー・ルクセンブルクにフランス最北東部(3) を含んでいる。1830 年建国のベルギー王国の名前を使うのは、それが必要な時のみに限る。なお地名に関しては、ベルギーの有名な言語紛争以降の地域言語主義の趨勢に関わらず、アントワープ（アントウェルペン（蘭）、アンヴェルス（仏））、ゲント（ヘント（蘭）、ガン（仏））等、日本語として馴染んでいる名称を用いる。
また文中で数多くの人名に言及するが（本文中か括弧内であるかを問わず）、綴りを参考のために例示するのが主目的な場合が多く、その場合には敢えてカタカナ表記を付していないことを了解願いたい。

2. 本研究分野の先行研究について

16 世紀のイベリア勢による大航海時代は同時にネーデルラントでも南部フランドルが栄え、その中心都市アントワープの黄金時代でもあったが、しかし 16 世紀後半は同時に宗教対立、オランダ独立戦争が始まる時期でもあり、とりわけ 1585 年のアントワープ落城の前後の半世紀ほどの間に約 17 万 5 千人がフランドルを離れ、そのうち約 15 万人がオランダに

（3） ダンケルクやリール等のフレンチ・フランドルを含む今のフランス最北のノール県に加え、アルトワ、カンブレー、エノーもフランドル（旧フランドル伯領）の一部であった。

難を逃れた（他はイギリス、ドイツ等(4)）。17 世紀前半における、やや唐突なオランダの繁栄自体はフランドルからの移入民に依っていることは広く知られている。1622 年の段階で、例えばライデンでは人口の 67% がフランドル人であり、ミッデルブルフでは人口の約 62%、ハールレムは約 51%、ロッテルダムは約 40%、アムステルダムとドルトレヒトでは約 33% がフランドルからの移入民で占められた(5)。またその結果、アムステルダムでは 17 世紀に入り、人口が以前の 3 万人から 10 万人へと急増した。

一般的には、ネーデルラントにおいてはもともと「北部（オランダ）は南部（ベルギー）に較べてずっと後進的な地域であった」（栗原、40 頁）のであり、「南部出身者は貿易や、行政、教育、軍隊、教会において多くの重要な地位を占め、エリート層を形成し」（ドナルドソン、163 頁）、例えば、「アムステルダムの大商人の半分以上は（南）ネーデルラント出身」（デュモン、42 頁）だったのである。いきおい VOC によるオランダ大航海時代も同様に、「アントウェルペン陥落によってアムステルダムに移住してきた国際的大商人たちは、オランダ商人をはるかに凌駕する巨額の資本…をこの市にもたらし」（栗原、46 頁）、「オランダに定住するようになった南部ネーデルラント商人の豊富な資金力が最も有力な支えとなり、…いくつかの航海会社が設立された」（永積、61 頁）とされるのである。同様なことはフランドル側からだけでなく、受動的な受け入れ側のオランダからも指摘されている。「最も欠けていたのは資本であったろう。しかし、スペイン自身がわざわざそれを与えてくれることになった。スペインが南部諸州、特にアンヴェルスの裕福な商工業者たちや、すでに経験を積み力をもっていたユダヤ人たちの家族を北部ネーデルラントに退去するように仕向けたからである」（ブロール、62 頁）。

以上の通り、フランドルがオランダの大航海時代を強力に推進したこと

（4） 例えばイギリスの場合、「最大の流入は、1560 年以降の半世紀にネーデルランドから移住してきたワロン人およびオランダ人新教徒の移民であった。…とくにノリッジでは、1570 年代に 1 万 5 千人の住民のうち、その三分の一がワロン人もしくはオランダ人であった」（クラーク＝スラック『変貌するイングランド都市』（酒田利夫訳）、三嶺書房、1989 年、140 頁）。

（5） https://flemishamerican.blogspot.com/search/label/Henry%20Hudson（December 9, 2010, 2021 年 8 月 29 日閲覧）

は遍く承認されているが、しかしそれでは具体的に VOC の設立・運営にフランドル人（系）がどれほど、どのように貢献したかについては、とたんに研究は少なくなり、当初の投資者（株主）の構成に関する言及が僅かに見られる程度である。例えば、VOC 設立に際し、アムステルダムでは 1143 人が株主として出資したが、その中身はと言えば、「88 人の出身者によってアムステルダム・カーメルの半額を負担し、しかもこの 88 人のうち 40 人はフランドルからの人」（科野、54 頁）という言及は稀有な例外である。しかも問題は、フランドルから持ち込まれた豊富な資金により VOC が設立されたのは良しとして、実際に VOC の主人公になり、東インドで貿易を行ったのは誰なのかについては、ほとんど解明されてこなかったことである(6)。

実際には VOC を研究するに際し、フランドルという要素に考慮を払う事すらほとんど行われない現況がある。それは例えば 16 世紀からフランドル人と仕事仲間であったポルトガル人だけでなく、イギリス人司令官セーリス等が有名な航海日誌のなかで首尾一貫して VOC のオランダ人をフランドル人と呼んで、実態を正確に反映していると思われるにも関わらずである(7)。上記科野氏以外で、日本で初期にその点に触れているのは

（6） 他で述べるように、VOC の水夫や兵士等の下級一般船員にどれほどドイツ人・スカンジナビア人等の外国人が多いかについてはしばしば言及されるし、他方、日本では「出島三賢人」（ケンペル・トゥンベリ・シーボルト）に象徴されるように、医師や専門的でアカデミックな外国人商館員については枚挙に暇がないほど多くの研究がなされているが、VOC の本来の貿易活動を担った上級職員については、「オランダ（商）人」として一括りにされる傾向が強い。もっともオランダとのみ貿易を認める幕府（長崎奉行）の監視下において、ドイツ人でドイツ語訛りのオランダ語を話した事例（例：シーボルト）や、公には（表では）フランス語の使用を控えた事例等、商館員側でも務めて「オランダ人」として振舞った側面も無視できない。なお「出島三賢人」など、目立った能力を有した彼らのうちの幾人かは、例えばドイツ人とは言え、フランドル系のドイツ移住者であるケースも散見される。典型的な例が 17 世紀に来日して、「鎖国」という訳語の出典となった『日本誌』を著したケンペル（Kemper、改名後 K(a)empfer または Kämpfer）であり、ヴェストファーレンの商業都市レムゴー出身の彼は、その家系や専門分野の人脈、さらには VOC による日本行きに繋がったスウェーデン外交使節（ロシア・ペルシャ）への参加の経緯等から、フランドルから移住した家系の、オランダ語も喋るドイツ人であると考えられる。下編を参照。

加藤榮一氏であり、日本でオランダ商館長を務めたスペックス（名：Jacques）やルメール（姓：Le Maire）の例に関して、「当時のオランダ人の氏名には、姓名または姓か名前の一方にフランス風の称び方をする者が少なくない」とし、またリーフデ号の生き残り船員で後にオランダ商館通訳となった人物（Cousijnsz. または Cousins(8)）に関して、オランダ語式に「コウサインスゾーン」と呼ぶよりは、「フランス流にクーザンと訓む方が妥当のように思われる」と脚注に記しており、必ずしも明示的にフランドルに言及したものではないが、本稿に近い視点に立ち、注意を喚起した例と思われる（加藤、61 頁）。

以上の問題意識のなかで本稿で試みることは、VOC のアジアや日本での活動を、とりわけフランドルからの人材供給という視点から読み直してみることである。つまり日本のみならず世界においても、これまでほとんど採られることが無かった切り口の研究であり、事実上、先行研究は存在しないと言える(9)。

それでは何故、過去に先行研究が存在しないほどに、こうしたアプローチが取られなかったのか。最大の理由は、依然として国際的・法的にオランダ独立が認められていない時期に VOC が設立されており、ネーデルラントは依然として南北一体であった時代であったこと、したがって当時の国内の人口移動問題を勘案する動機に欠けたことや、そもそも混乱の時期を対象にそれを行うことに無理があったものと考えられる。オランダが公式に成立して以降は、いよいよ時代的には民族国家が前面に出てきて、新生「オランダ」の会社の行った功績のうちのフランドルの貢献について別

（7） 森『三浦按針』264 頁、拙稿「帰国しなかった理由を巡る一試論」118 頁（森・クレインス・小川『三浦按針』所収）

（8） Cousin、Cousins は、Cousyn、Cousyns の “y” が “i” に置き換えられたもので、英、仏やフランドルの姓であり、Cousijn、Cousijns の “ij” が “y” に置き換えられた Cousyn、Cousyns はいずれもフランドルの姓である。いずれにしてもすべてもともとは同じ姓であり、本来、フランドル的な姓である。

（9） 例えば故山本博文氏（元東京大学教授）、木村直樹氏（長崎大学教授）、森良和氏（元玉川大学教授）、F・クレインス氏（国際日本文化研究センター教授）、太田淳氏（慶応義塾大学教授）、R・アーヴィング氏（元関西学院大学教授）、行武和博氏（日蘭貿易研究）との面談等のなかでも、異口同音に、フランドル視点のアプローチによる VOC 研究は聞いたことがなく思い当たらないとの由であった。

途、切り分けて抽出し直す動機が無かったと考えられ、他方、フランドル側からしても、本国から離脱しすでに隣国人となった新教徒に関して、声を大にして故国との絆やその隣国への貢献を主張し続ける強い動機もない。しかし何よりもその単純にして最大の要因は、民族国家の時代以降、後世の人々が歴史を国ごとに捉える習慣が根付いてしまったことであろう。VOC はオランダの取組みであるとの固定観念が行き渡り、その結果、オランダの枠を超える「ドイツ人」や「イギリス人」、「スウェーデン人」等の外国人であればいざ知らず、オランダ人という枠に収まる、「国内的な」人的側面についてはあまり思考しなくなってしまったのではないだろうか。

3. 本研究の手法について

さてそれでは VOC の人的側面を研究すると言っても、具体的にはどのような調査方法が可能か。上述したように、投資した株主を分析することは、少額の一般市民の投資者が多数存在すると言う理由で、またそれゆえ彼らの出自を探ることはほとんど不可能に近いという理由で、今、取り得る調査手法ではない(10)。とりわけオランダへの移住年や出生地等、何をもってかつての同国人（＝ネーデルラント人）をフランドル人（系）と見做すかという基準の問題が大きく立ちはだかる。同様に船員や兵士という VOC の下層の構成員として東インドなどに渡航してきた者を調べることも、絶対数が多数に上るうえ、その出自を調べることは極めて困難であり、VOC の運営主体を知ることにはほとんど資すことがない。なにしろ VOC が設立され時代が進むにつれ人材不足となり、ハンブルクやブレーメンにも船員募集の窓口が作られ、幹部職員以外では、ドイツやスカンジナビアの船員・水兵を中心にリクルートの国際化が進展し（Boxer, p. I-85)、「17 世紀半ば頃で、兵士の 65%、船員の 35% が外国出身」（羽田、178 頁）であり、後にはその割合はさらに高じたからである(11)。

他方で投資者の意向は、現実には本稿で検討するように、本国の各支部

(10) 株式は当初、より多くの人の手に届くように小さく分割して発行されたが、やがて次第に行政官や大商人たちがその大部分を押えてしまった。オランダ政治に影響力を持つその同じ階層の人々が、東インドでも支配者となっていったという（ブロール、63 頁)。

（カーメル、部屋という意味）の役員やバタヴィア総督の人選等、会社幹部の登用に効果的に反映されているものと考えられる。より直接的で効率的なのは、やはり VOC 設立前の先駆会社や統一なった VOC 六支部の役員、それらが派遣した船団の指揮官、そして歴代バタヴィア総督や同じく日本において歴代平戸・出島商館長にどのような人物が任命されているかを調べることである。会社の「所有者（投資者）」よりも「運営者（意思決定者）」に重きを置き、組織の上級幹部の選ばれたる背景・出自を探ることであり、それにより全体として VOC の意思決定や実際の運営を誰が担ったかが明白になるであろう。

そのための手法としては、VOC の運営に誰が携わったかを調べるために、VOC の主要人物家系図サイト（www.geni.com/projects/voc）等で出自調査・分析を行い、フランドル系の関与の程度を調べる。混乱した世相を反映し、移住を迫られる緊迫した事情ゆえ、名門出身の幹部でも家系図が散逸、不明なケースが少なくはないが、一般的には名門の家系や幹部であればあるほど家系が残されている傾向がある。例を挙げれば、事実上の VOC のトップとされるバタヴィア総督全 68 代は、それぞれの詳細さは別として、ほぼ全員の家系が残されているが、平戸や出島の商館長レベルでは、わずか一部の人しか判明しない（後編参照）。

実際の家系調査は、家系図が公知であるなら、それを最後まで辿ってルーツとなる地を探し、ルーツの地が不明の場合は、父方および母方の配偶者の幾多の姓から家系のルーツ、つまりネーデルラントの南か北かの特定に努める。過去の家系が全く不明の場合は、その姓名に加え、配偶者や（先祖でなく）子孫の家系から家系を類推するが、それらの場合には判断が断定的にならないよう留意する(12)。いずれの場合も、判断するに際し、本人の仕事仲間等の人間関係をも考慮することが肝要である。何故なら様々な人材が組織や活動に参加しうる（すべきとされる）現代社会とは

（11）　イギリスに比べるとオランダでは、漁業や海軍なども含めた船員のなかの外国人割合は高く、1607 年の段階で 15%、1635 年 20%、世紀末には 30% 強と増加しており、さらに 1785 年には 50% 超と頂点に達している（Lottum, “Sailors”, p. 320）。18 世紀にはとりわけ東インド航海と海軍の外国人割合が高まり、海軍に至っては世紀後半には 70% の高率に至っている（Lottum, “Sailors”, p. 323）

（12）　家系調査の分かりやすい実例を挙げると、例えばコロンブスのスペイン時

まったく違い、当時は何事も地縁血縁が重視され、商売でも結婚でも、全てを狭い範囲の仲間と行うことが社会規範であったからである。

例えば「イギリスでもスペインでも、またオランダやフランスでも、貿易商人の一族の若き子息たちは、環太平洋のあらゆる場所に派遣されて商売を学び、…商業の最新の技術を可能な限り身につけた」（ベイリン、143頁）のであり、こうした初期の貿易ネットワークは、親族のネットワークであったのである。こうして「独占」を巡る考え方が現代とは正反対で、イベリア勢にしてもオランダにしても、当時は貿易を独占することが「当然実現すべき目標だったのである」（羽田、2017）。これには国内や海外における貿易の国や会社による独占だけでなく、背景を同じくする人々による総督や商館長等の会社のなかの権限や主要ポストの独占も当然含まれる(13)。

さて、移民から成る米国をはじめ、欧米では姓名のルーツを扱うインターネット上のデータベースサイトが多く整備されており、それらは名簿

代の姓コロン（Colon）が姓名検索サイトにより、「ユダヤ・スペイン・ベルギー」とされている場合、その国の組合せから、典型的にはスペイン人の改宗ユダヤ系ないしイベリアからの移住フランドル人を示唆している可能性を察知することが出来る。因みに出生地イタリアでの姓コロンボ（Colombo）は、「イタリア、ユダヤ、スペイン、ベルギー、ハンガリー」の姓とされる。一般的なコロンブス（Colombus）はコロンボのラテン語式の姓が定着したものである。

あるいは南アフリカの悪名高きアパルトヘイトを終焉に導き、1994年のネルソン・マンデラ氏への政権移行で最後の白人大統領となったフレデリック・デクラーク（デクレルク＝de Klerk）も、17世紀まで家系を遡ると、オランダのゼーラント生れで、移住後に南アで死亡したアブラハムとなり、さらにその先代ピーテルはピエールとも呼ばれ、何とその姓はフランドル式のルクレルク（le Clercq、フランス語式には「ルクレール」）に変わり、さらに16世紀まで遡ると家系はゼーラントやフランドルに収斂する。なお改姓後のオランダ語のデクレルク姓だけからは判然としないが、元のフランス語のルクレルク姓（特にle Clercという綴り）となるとユダヤ系である可能性が示唆される。現に父方配偶者にはノルマンディー、ブルターニュ、ロレーヌ地方、さらにはチェコの出身者もおり、まさに改宗ユダヤ系の家系を思わせる。なお南アフリカはオランダ系アフリカーナーが開拓した地として有名であるが、オランダ系と並んで、フランス語系ユグノーが開拓に尽力したことでも知られている。こうした家系調査により、ネーデルラントを舞台にした宗教改革の時代以降の国を越えた人の移動（と姓の変遷）の実態が垣間見える。

式のものから、個別の姓の由来を検索できるタイプのものまで様々のタイプがあり、慎重を期して用いるならきわめて有用である。例えば www.americanlastnames.us を中心にして、複数の姓名起源検索サイトを併用し、情報の誤差を最小限にすべく務める(14)。インターネット時代の到来を待たねば不可能であった研究手法であるとも言える。

4. オランダとイギリスの東インド会社

さて形式的に史的事実だけを並べれば、VOC に至るまでには、まずフランドル系と思われる 9 人のアムステルダム商人によって遠国会社が早くも 1594 年に設立され、1597 年設立の新アムステルダム東インド会社と翌 1598 年に合併して旧会社が出来、この旧会社はさらに、これまたその名が示す通り、1599 年にフランドル系の商人たちが設立した新ブラバント会社と 1600 年に合併し、連合アムステルダム東インド会社と名前を変えた。この会社を中心にして、林立し始めた各地の航海会社を政治的に大同

(13)　オランダはこうして日本貿易を 2 世紀以上にわたり独占することとなり、そのなかでもフランドル系のオランダ人がそれを独占し続けたこととなる（下編参照）。それ以前はマカオ・ゴア拠点のポルトガル人とイエズス会が、同じカトリックのスペイン（マニラ貿易・フランシスコ会等）を排除してでも、日本（貿易・宗教）を独占しようとした。グロティウスにより、教皇の権威の下での海の独占は否定され、海洋自由の考えは生まれたが、その「自由」の旗印の下での「独占」志向に根差した植民地獲得競争が進行したのであり、自由の結果としての独占を悪とする考えには未だ至らなかったと言えよう。そもそも経済的な独占を好ましからざるものとして政策的に排除が始まったのは、やっと 20 世紀に入ってからであり、米国の石油の 90% を独占しているとされたロックフェラー（フランドル系）のスタンダード石油が 1911 年に「シャーマン法」の適用によって 34 社に分割されたことなどがその嚆矢である。

(14)　本書拙稿において、欧米の姓の由来を探るために用いたのは主として下記のデータベースである。

http://www.americanlastnames.us/
https://www.surnamedb.com/Surname/
https://www.houseofnames.com/
https://surnam.es/
https://forebears.io/surnames/
https://www.ancestry.com/

団結させて1602年に出来たのが連合ネーデルラント東インド会社、いわゆるオランダ東インド会社（VOC）である。合併に合併を重ねて出来たこのVOCでは、後で述べるように、アムステルダムの人材・資金が圧倒的な支配力を有し、中核的な位置を占めた。

ここで重要なことは、VOCは、1600年に完全な実態を備えており、それに至るまでの世紀末にすでに構成各社は幾次もの船団派遣を行った実績があり、それらが政府の方針で、1602年にオランダ全土で一社の独占企業に衣替えされただけという事実だ。つまりイギリスより2年遅く設立されたことが、イギリスよりスタートが遅いことには必ずしもならない。むしろ逆に、イギリスは1600年の年末に設立しているが、翌年から1613年までの間は、一航海毎に清算する個別的な航海を13回行っただけで、当座企業としての色彩が濃厚で、未だ株式会社の形態を備えていない。イギリスはやっと1613年にオランダ方式を見倣い、一航海毎の清算方式から、合本（ジョイント・ストック）企業制に改めたのである。しかもエリザベス女王が与えた会社の独占性への異議申立てが続き、17世紀に入るとジェームズ一世自ら、親がフランドル人の繊維商人ウィリアム・クルテーン（Curteen）に東インド貿易の会社（コーテン会社＝Courten Company）の設立を許し航海の特許を与えるなど（後にクロムウェルが両社を統合）、混乱が長らく続いた。元祖よりも1世紀以上も後の1709年設立の合同東インド会社こそが、19世紀中葉まで続いた、いわゆるイギリス東インド会社の出発点とされることもあるほどである(15)。

さてVOCの資本金は約640万グルデンであり、イギリス東インド会社の第一回目の航海の起債額を換算すると約53万グルデンとなり、オランダの十分の一にも満たない規模であることが分かる。合併前の諸会社は支部（カーメル：部屋と言う意味）として存続し、それらはアムステルダム、エンクハイゼン、ホールン（以上が現在の州区分での北ホラント）、ロッテルダム、デルフト（同じく南ホラント）、ミッデルブルフ（ゼーラント）である。必ずしも株主であることを要しない取締役60人により統括されるが、その上に意思決定機関たる重役会である「十七人会」が置かれた。各カーメルの出資比率に応じ、アムステルダム8人、ゼーラント4

(15)　浅田、86頁。以下の拙稿も参照。「イギリス人がなぜオランダ船でやってきたのか」40頁（森・クレインス・小川共編『三浦按針』所収）。

人、あとの 4 カーメルから一人ずつ、さらにアムステルダム以外のカーメルのグループから輪番で一人という構成であった。

各カーメルの資本金を見てみると、640 万グルデンのうち、アムステルダムが 370 万グルデン弱、ゼーラントが 130 万グルデン強であり、二強だけで約 500 万グルデンを占めている。まさに二強が他を圧倒しているのであり、とりわけアムステルダムだけでも過半の資本を負担し、ゼーラントも 20% を超えている。以上からも分かる通り、オランダ東インド会社と言っても、構成要素のアムステルダム系の会社が圧倒的な中心になって合併し、新会社でもその中央に君臨していたのである。

こうして 17 世紀に、いよいよネーデルラントが海洋進出する素地が整った。それまでアムステルダムは、主としてバルト海諸国に向けた毛織物や穀物の積出港として重要性を有していたが、それに加えて 16 世紀に世界一の商都として繁栄していたアントワープから、オランダ独立戦争の過程を通じ、国際交易のネットワークを受け継ぎ、アジアからの産品の中継貿易が盛んになった。しかも 1580 年以降、ポルトガル王も兼ねることとなったフェリペ 2 世が宿敵オランダの海運業に打撃を与えるべく、ネーデルラントの船のリスボン港寄港を禁止したので、自ら東方貿易に乗り出す必要に迫られた。上述した通り、幸いにも宗教戦争に翻弄されるフランドルから避難してきた多くの人材とともに、資金、技術、文化が流れ込んでおり、VOC 設立に際しても大きな支えとなった。

5. オランダの三人のパイオニアたち　―ポンプ・リンスホーテン・ハウトマン

ポルトガルは東インドとの通商を独占するため、当然ながら東インド方面への航海に関する技術や情報を秘匿する。しかしオランダにとっては上手いことに、フランドル・ポルトガル間の蜜月を利用して、三人の人物がすでにポルトガルの頭脳ないし心臓部とでも言える場所に潜り込んでいた。まさにオランダ海外進出のパイオニアと呼ぶべき人々である。

まずディルク・ヘリッツゾーン・ポンプ（Dirck Gerritsz Pomp）が挙げられる。通称「ディルク・シナ」は、中国通であるから本国ではそう呼ばれた。1544 年にエンクハイゼンの生まれ、11 歳の時、リスボンのユダヤ系と思われる親戚宅に送られ、貿易やポルトガル語を学んだ。1568 年

頃からゴアに渡り、砲手として生計を立てつつ、貿易にも従事していた。年月は明らかでないが、リーフデ号に先んじて、日本に来た初めてのネーデルラント人と言われ、1585 年 7 月末にはポルトガル船にて長崎に二度目の訪日を果たし、7 ヵ月余り日本に滞在、日本にて一冬を経験している。なおこの人物は後に、そのリーフデ号も含まれるマヒュー船団に参加、南米太平洋岸でスペイン側に捕虜にされ、数年後に捕虜交換で釈放されて無事ネーデルラントに帰国しており、結局、マヒュー船団での三度目の訪日は果たされなかった(16)。

彼は、カトリックであった事実等から、そしてポンプというユダヤ系を示す名前とも相まって、改宗ユダヤ系のオランダ人であろう。かつポンプというのはハンガリーの姓の可能性を含んでおり、家系の由来は不明である。もっとも父の名はヘリット・メールテンスであり、Maertens がオランダよりフランドルに圧倒的に多い姓であるので、11 歳でリスボンの親戚の家に送られたという事実とも併せて考えると、少なくともネーデルラントの土地で婚姻によりフランドル化した家系である可能性が高い。

次にヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン（Jan Huygen van Linschoten）は、1562 年にハーレムに生まれ、父親が宿屋を営んでいた、活気溢れる港町エンクハイゼンで育った。当時の血気盛んで冒険心に溢れる若者たちが皆、そうしたように、リンスホーテンも 16 歳の時、義兄ウィレム・ティンが商売を営んでいたスペイン最大の港町セビリアに行き、貿易の仕事をしていたが、その後、フェリペ二世がポルトガル王も兼ねるようになったのと軌を一にするようにリスボンに居を移した。さらにカトリック教徒でもあったので、義兄の斡旋で 1583 年にゴアの大司教の秘書としてインドに渡った。1588 年にはゴアを去り、1592 年にオランダに帰国し、5 年にわたるインドでの見聞を『東方案内記（Itinerario）(17)』とし

(16)　ポンプは失敗に終わったマヒュー船団の航海から帰国後、何を思ったか、1606 年のカールデン艦隊で 4 度目の東インド・日本向けの航海に出た。しかしジャワ到着後、健康上の理由からマテリーフ船団で帰国予定のところ消息が途絶えている。他方、徳川家康から帰国を認められたリーフデ号船長のクワケルナックもバタヴィアからマテリーフ船団で帰国を希望していたが、ポルトガルとの戦闘で死亡し、ポンプに再会することも、帰国することも叶わなかった（森『リーフデ号』56 頁）。

(17)　リンスホーテン『東方案内記』岩生成一等訳注、大航海時代叢書Ⅷ、岩波書店、1968 年

て 1595 年と 1596 年に順次、アムステルダムで出版した。これはネーデルラントの商人たちの東インド方面進出にとり、格好の案内書となった。

このリンスホーテンも、フランドルとの深い関りが窺える。リンスホーテンとはユトレヒト郊外の村であるが、親を含め親戚のだれも使わない「ファン・リンスホーテン」という名の由来は不明である。大事なのは、ヤン・ハイヘンの本来の名前の方で、Huygen は父の Huig に由来するフランドルの名である。しかし彼本人はハールレム生まれで、公証人だった父親（Huig Joostensz）も同じくハールレム生まれ、母親（Marytgin Tin Hendrixs）は南ホラントの出身である。Joosten はオランダ的であるが、Joostens はフランドル的であり、他方、母親の名前はオランダ的である（Tin も含め）。彼が帰国後に結婚した相手の名が Reynu Meynertsdr Seymens といい、最後の本人の姓も、真ん中の父親の名（Meynerts、末尾の「娘」を意味する dr を除いたもの）も、さらには妻の父方祖母の姓 Swaert も、いずれもフランドルの姓と思われる。微妙さは残るが、リンスホーテンの家系はフランドル的であると言える。

他方で彼の生涯はフランドル人人脈を中心に展開されている。リンスホーテンの著書を出版したのがコルネリス・クラースゾーン（Cornelis Claesz）というアムステルダムの有名な出版者であるが、南の学都ルーヴェン生まれのフランドル人である。この出版者はビジネス的に機転と気の利く人物で、『東方案内記』でより多くの読者をつかむべく、本書の中身に、ラテン名ベルナルドゥス・パルダヌス（通名 Barent ten Broecke はフランドル系を示唆する）と言う、広く旅した経験のある博士を登用して、リンスホーテン本人は経験のないアフリカ・アメリカの既述や具体的な渡航に関する情報を加えたり、当代随一の地理学者であるプランシウス（後述参照）の世界地図などを挿入したり工夫を凝らしている。さらには当時、出版といえば、印刷した紙の束を売るものだったものを、製本して装丁したものを富裕層向けに考案してもいる。その結果、本書は三分冊の体裁をとる大部の書籍となっている。なお後に続くハウトマンやファン・ネックの航海記を出版したのも、この出版者である。

その『東方案内記』のなかでリンスホーテンは、ジェノア経由でゴアにやってきた、アントワープ出身のダイヤモンド研磨の若い職人（フランス・コーニング）について言及したり、コロマンデルに 30 年も住む、特別に懇意にしているフランドル人に触れたりしている。さらにベギン会修

道会に触れたりもしており、フランドルとの距離の近さを感じさせる。帰国後のリンスホーテンは、最後の航海を控えた上記ポンプ（ディルク・シナ）やパルダヌス博士たちと交流する、フランドル人脈を中心とした日々を送っている。

リンスホーテンはしかしその後、自身の著書も一役買い、本格化した東インド航海に関わるのではなく、一転して、フランドル出身でミッデルブルフの大商人ド・ムシュロン（下述参照）が旗を振る北方航路に身を投じた。こうしてリンスホーテンは有名な探検家ウィレム・バレンツ（Barentsz）の探検隊に加わり、1594 年、95 年の二度、北東航路発見の航海に出た。その後、彼は故郷で裕福な商人として余生を過ごし、1611 年に亡くなっている。

最後に、後にネーデルラント人として初めて船団を率いてジャワ島に到達したコルネリス・デ・ハウトマン（Cornelis de Houtman）であるが[18]、ゴーダ（ハウダ）生まれのコルネリスとフレデリックの二人のハウトマン兄弟は、後に遠国会社を設立するフランドルと繋がりの深いアムステルダムの 9 人の商人の計らいで、彼らの商務代理人という形でリスボンへ 1592 年から 2 年間派遣された（コルネリスは 27 歳の時）。ハウトマン家は遠国会社の出資者の一人である Pauw と繋がりがあり、それ故に大役が回ってきたものと見られる。その間、スパイの容疑で投獄されるなど苦労しつつ、東インドへの航海情報をたっぷりと仕入れオランダに帰還した。コルネリスは、1595 年、設立なった遠国会社から司令官として 9 隻からなる船団を預かって東インドに向かい、それに弟フレデリクも同行、 オランダ人として初めてジャワに到達した。

彼の名前は、以下の 3 通りで表記されることがある。de Houtman, Houtman, van der Grude である。兄のコルネリスの場合、通称が “de Houtman” だったわけで、それが公式にも記録され定着した可能性がある。ちなみに父だけでなく弟フレデリクも単に Houtman と名乗っている。コルネリスは、父 Pieter Cornelisz Houtman と母 Agniesje Fredriks の息子である。3 歳年上の姉は、Meyndert Jacobsz Caescooper の妻となっている。夫のカースコーペルという姓は、フランドルの姓であり、果たして

（18） ハウトマン / ファンネック『東インド諸島への航海』生田滋等訳、大航海時代叢書第Ⅱ期 10、1981 年

夫の母の姓 Meynerts もフランドルの姓である。6 歳年下の弟フレデリクの妻は、Vrouwtje Cornelisdr Clock であり、Clock もフランドル姓である。以上からハウトマン一家は、明らかにフランドルに出自を有する家系と言える。付言するに、コルネリスを Cornelis と綴るのはフランドル式であり、オランダ式ではコルネリウス（Cornelius）である。

なお兄コルネリスはフェーレ会社からの次の航海の途中、アチェで襲撃を受け死亡、弟フレデリクはアチェに 3 年にわたって抑留され、帰国後、マレー語の辞書などを編纂している。フレデリクは、その後 VOC に加わり、アンボイナの初代長官や、カールデン、ボット、レアルという錚々たる名前が連なるテルナテ長官の 4 代目を務めており、リスボン派遣駐在以来、相変わらず VOC の中枢との密接な関係が窺える。

ハウトマンの航海記には幾種類もあるが、代表的なものは下級商務員として船団に参加していた別名ギョームともフランス語式に名乗ったウィレム・ローデウェイクスゾーン（Lodewycksz）というフランドル出身の教養のある人物のものであり、『大航海時代叢書』に収録されているのもそれである。

6. 先駆会社「遠国会社」を作った人々

1602 年にオランダ東インド会社 VOC ができたのは、それまでも統合を繰り返していた既存の幾つかの先駆会社が国策として半ば強制的に統合されたわけだが、その一番最初の先駆会社は、その名を遠国会社（Compagnie van Verre）と言った。「フェーレ（Verre）」とは「遠い」と言う意味であるが、フランドルの人名（姓）でもある言葉である。1595 年に 9 人のアムステルダムの商人が各々 1 万 2 千ギルダーを出資して設立したわけだが、その前年の春、アムステルダム市内のワイン商人マルティン・スピルの家にこれらの人々が集まったことにより、17 世紀オランダ海洋帝国の時計の針が回り始めた。初めに、ヘンドリック・フッデ、レイニール・パウ、ピーター・ハッセレール、ヤン・ヤンスゾーン・カレル、シフェルト・ペテルスゾーン・セム、アレント・テン・フルーテンホイスが集まり、後にドイツ生まれのヤン・ポッペン、アントワープ出身の商人ディルク・ファン・オス、そして唯一のカトリック教徒だったヘンドリック・ビュイクというメンバーが加わった。

ヘンドリック・フッデは、このメンバーの中の中心人物であり長老格で、アムステルダムで一番裕福な人物とも言われた。フッデが亡くなった1596年には、その後継者として後述のヘリット・ピーテルスゾーン・ビッケル（Gerrit Pietersz Bicker）が加わった。もう一人の中心的な人物は、ディルク・ファン・オスという、家系のルーツはオランダにあるものの（スヘルトヘンボス（'s-Hertogenbosch）の Oss)、アントワープ生まれの人物で、アントワープ陥落までスペインに対して戦った市民軍のリーダーで、陥落後、まずミッデルブルフに避難した。大物の保険・金融業、船主であり、アムステルダム為替銀行の創設にも携わっている。1606年に世界初の証券が発行されたが、それは彼の署名入りのものだった。VOC の設立に際しても、47,000 ギルダーの出資をしており、それはその後、増額され、1609年には120,000 ギルダーとなっている。VOC の初代事務局長を務めている。

これら9人の中で生まれた場所が明らかなのが、ドイツ生まれのポッペン、ハーレム生まれのハッセレール、パウとフッデ代役のビッケルはアムステルダム生まれ、ファン・オスがアントワープ生まれであり、他のメンバーの生地が不明ということが、混乱する時代を象徴している。まず表面的に苗字だけから判断するなら、パウ、ハッセレール、カレル、オス、そしてビュイックはフランドルの姓を有し、そこにルーツを有する可能性が高い。9人の出自について姓と家系から分析すると以下の通りとなる。

・Hendrick Arentsz Hudde

フッデの生年・生地は不明である。ただし父 Arent は、オランダ東部のカンペンで生まれている。メンバーのなかでは長老格である。両親は Arent Hudde と Trijntje Jacob Huijgensdr（Huygensdr）である。母が祖父から受け継いだ Huygen という姓や、祖母の Taemsdr という姓もフランドルのものである。フッデ夫妻には4人の子供がおり、それらの配偶者の姓は、4つともフランドルのものである。5人兄弟のうち、既に述べたように Reymerichje は、本メンバーの下記 Grootenhuys と結婚している。

・Reynier Adriaensz Paeuw（Pauw）

Reynier も Adriaens も、さらに Pauw も全てフランドルの姓・名と判別されうる。本人は1564年、アムステルダム生まれであり、父、祖父、

曾祖父はゴウダ生まれである。父親方を 4 代遡ると、Jacob Pauw のところで、生地が不明となる。母親は Anna Jacob Lucasdr van Persijn van Beverwaarde という長い名前で、アムステルダム生まれである。祖父 Jacob もアムステルダム生まれで、妻の姓はフランドル姓の van Persijn、曾祖父は Lucas で、アムステルダム市長を務めており、その母の姓がフランドル系と思われる Baerdendr である。さらにその先代 Jacob もアムステルダム市長を務めており、その母の姓 Stuyver はフランドルのものである。母親方はまさに政治エリート一家で、完全にフランドル系と言える。

・Pieter Dircksz Hasselaer

本人も、父 Dirck Simonsz Hasselaer、母 Aagje Pietersdr Hoos もハーレム生まれである。Hasselaer はフランドルの姓である。母方祖父が Havicksz という姓で、これもフランドルの姓であろう。本人は二度結婚している。妻の姓はそれぞれ Pietersdr と Benningh であり、Pietersdr の母は Albertsdr de veer であり、完全にフランドルの姓である。兄の妻の姓が Princen であり、これも同様である。父親方の姓と婚姻によって強くフランドルの出自が示唆される家系である。

・Jan Jansz Carel

1574 年生れだが、生地は不明である。父も同姓同名（'de oude'）で、Carel と言う姓は典型的なフランドルの姓である（Jansz の語尾の "z" を除いた Jans も同様）。父も生地は不明である。これまた生年・生地が不明な母は Floris と言い、これもフランドルの姓である。カレルの妻は実に、下記の 9 人の商人仲間のアレントの妹アンナであり（Anna Jansdr ten Grootenhuis）、つまり Johan ten Grootenhuis と Reymerichje Hudde の娘である。カレルの 3 人娘の夫たちの姓は、それぞれ Ranst、Boreel、Ranst であり、すべてフランドルの姓である。フランドルのルーツが明快な家系である。

・Syvert（Sieuwert）Pietersz Sem

1560 年生まれであるが、生地は不明である。Sem というのはユダヤの姓である。父母の姓からもネーデルラントの南北を判別することは困難であるし、祖父母については不明である。貴重な手がかりと思われる本人の Pietersz という名前（「父 Pieters の息子」という意味）は実はフランドル的であり、また、本人の二人の妻の姓、それぞれ Meebael、Bouwer に

ついて、前者はフランドルの姓であり、Bouwer は、南北を特定出来ないが、その兄弟 6 人の配偶者の姓を並べてみると、ten Berch、van Warmont、ten Borch、Dob、Reynst であり、全てフランドルの姓である。その Reynst は、第二代 VOC 総督 Gerald Reynst の兄弟である。総じてフランドル系家系と思われる。

・Arent ten Grootenhuyse

1570 年生まれであるが、生地は不明である。姓名だけからではネーデルランドの南北は識別できない。しかし父ヨハンは北の Kampen 生まれである。母 Reymerichje は上述の Hudde 家の出身であり、さらに祖母は Trijntje Jacob Huijgensdr といい、曾祖母も Griete Taemsdr であり、どちらもフランドルの姓を有している。本人の兄弟に目を転じると、妹の Anna が、アムステルダム 9 人衆の一人、上記カレル家のヤンに嫁いでいる。妻は、Reyersz van Heemskerck と Engbrechtsdr Ramp Proost の間の娘であり、Heemskerck、Proost などから、完全にフランドルのルーツを持つ人物と考えられる。果たしてその妻の 3 人の兄弟たちの配偶者は、van der Dussen、Jacob Adriaensz Pauw、Maria Pauw であり、3 人全てがフランドルの姓であることはもちろん、配偶者を通じて上記 Pauw 一家と密接に血縁で結ばれていることが分かる。

・Jan Jacobsz Poppen（VOC 特許状では “Poppe”）

ドイツ生まれで父母については不明。姓については Poppe とするなら、もともとネーデルラントの姓であり、しかもフランドルに多い姓である。世界を見渡しても、この珍しい姓はノルウェー・スウェーデン・ロシア等の有力な人物にも散見されたりして、フランドル商人の海外進出に伴いネーデルラントから広まった可能性を感じさせる(19)。母方の祖母で Centen、さらに曾祖母で Consten というフランドルの姓を持つ人物がいる。

(19)　リエージュ出身の産業家ルイ・デヘール（de Geer）はスウェーデン国王に招かれ鉱山開発や製鉄業を興して、スウェーデンの「近代重工業の父」と言われ、一族は後にスウェーデン首相さえ輩出した（これらの点については、ミュラー『スウェーデン貿易』に詳しい）。それに伴い、多くのリエージュ出身の技術者がスウェーデンに渡ったので、フランドル姓が多く残っている。武器産業を含めたオランダ・スウェーデン間の重工業・鉱業分野での蜜月は、とりわけスウェーデンにとって重要な歴史的意義を持っている。同様に帝政ロシアにも多くのフランドル商人が渡っており、アントワープ全盛期には「ベルギー人は世界中を駆け巡り、ツァーの帝国で商売を行ない…」（デュモ

本人の 3 人の子たちのうちの二人は、それぞれ van der Wiele、van der Wiele van der Werve というフランドル姓の 配偶者を得ている。

・Dirck van Os

本人が 1556 年のアントワープ生まれである。アントワープの戦いで抵抗軍のリーダーを務め、陥落後、ミッデルブルフに居を移した。父も同姓同名で、Os はフランドルの姓である。しかし元々の家系のルーツは、北ネーデルラントのスヘルトヘンボス（'s-Hertogenboch）とも言われる。父、祖父、曾祖父などの生地は不明である。母の姓は Docters であり、Docteur と同一と見做すなら、フランドルの姓である。

・Hendrick Buyck

1551 年生まれだが、本人の生地は不詳である。一般にビュイック家は、もともと 14 世紀に遡るフランドルの貴族である。ゲント・ブリュージュ・イーペルに所領を有し、フランドルの政治経済・軍事・文化に大きな影響力を及ぼして現在にまで至る名門である。近世初期の混乱期には家系の拠点はアムステルダムであり、ヘンドリックはカトリックながら、招かれて遠国会社の設立に参加した。妻は Griet Pietersdr Verduyn で、これもフランドルの姓である。珍しくカトリック教徒であり、家系は上流の証しであったフランス語の話者であった事実とも相まって、本件ビュイック家は完全にフランドルの家系である。本来の綴りは Buick（ないし Buik、Buijck）であるが、フランス語の影響により Buyck となった。このビュイックはアメリカの自動車会社ゼネラルモーターズ社（GM）のブランド名 BUICK と同じ名前である(20)。なお順序としてはビュイックが GM の生みの親という関係ではある。

ン、34 頁）とされる。なお成功したものの中にはロシアの貴族に叙された人物さえいる（Timofey Yefremovich Fan-der-Flit（van der Vliet）。1775 年サンクトペテルスブルグ生まれ）。

(20)　米自動車会社 GM のブランドとしてのビュイック（Buick）の名は、2 歳で両親とアメリカに移住してきたスコットランド移民のデーヴィッド・ビュイックが設立したビュイック社に由来するが、「フレミング」や「ダグラス」等の他の典型的なスコットランドの名前同様、「ビュイック」ももともとはフランドルの姓である。GM の他のブランドとしては、キャデラック（Cadillac）、シボレー（Chevrolet）が有名であるが、前者はデトロイトを開拓したフランスの貴族の名前に、後者はスイスのフランス語圏（ヌーシャテル）出身の名ドライバーの名前に由来する。GM の創業者ウィリアム・デュラント

結局、アムステルダムで遠国会社を立ち上げた 9 人の商人たちは、フランドルとの関りに関しては、そもそもアントワープ出身の Os から、少なくとも妻の姓を通ずる繋がりしか明白には確認出来ない Sem まで、濃淡は様々であれ、少なくとも 9 人全員がフランドルに何らかの血縁的関りを有するアムステルダム商人であると言って間違いではない。

ところでこのメンバー間の人間関係は極めて濃密である。航海関係では、ファンオスの北方航路探検に、すでにハッセラールとカレルが参加している。このグループは血族的にもかなり繋がっており、カレルはフルーテンホイスの兄弟の一人アンナ（Anna）と結婚している。そのフルーテンホイスの母は、フッデの兄弟の一人レイメリシエ（Reymerichje）である。フルーテンホイスの妻 MariaWillemsdr van Heemskerck の兄弟二人は、Pauw の兄弟二人と結婚している（Maria Pauw と Hendrick Willemsz van Heemskerck、Jacob Pauw と Machteld Willemsdr van Heemskerck）。さらにフッデ代役のビッケルの母は、エリザベート・ベッニンフ（Elizabeth Benningh）であり、ハッセレールはビッケルの従弟に当たると思われるマルグリット・ベッニンフ（Margriet Benningh）と結婚している。

アムステルダムの大商人の半数以上がフランドル人と言われた時代である。グループのリーダーのファン・オスがアントワープ出身であり、他にも生まれた土地が不明で、混乱のフランドルから逃げ延びたと思われる人物が多く、さらに婚姻関係が濃密なメンバーだけに、この出資者グループは、全体としてもフランドル色がきわめて濃厚であると言える。

7. 先駆会社「旧会社」を作った人々

この遠国会社は、その後、旧会社に発展統合され、それと新ブラバント会社がさらに糾合され、1601 年、連合アムステルダム会社となり、翌 1602 年、最終的に VOC 設立に至る。その旧会社の役員（Governor）には、先に掲げた上記遠国会社の 9 人に加え、下記の 9 人が加わった。

（Durant）の出自を念頭に、その命名の背景を探るのは興味深いが、ここではそこには踏み込まない。少なくともこの家系の Durant 姓はフランス的であるが、もともとはよりフランドル的な Durrant 姓であった。

・Vincent van Bronckhorst

その姓はオランダ・ヘルターラントのものだが、名の Vincent はフランス語由来である。加えて同世代の同姓の有名な画家たち、例えば黄金時代の画家の一人である Johan Gerritsz van Bronckhorst などもヘルターラントが地盤だが、フランドル系の血も引いており、師匠や仕事仲間はフランドル系が多い（17 世紀黄金期のオランダ人画家は多くは、混乱の中、南から移住したフランドル系）。本件のヴィンセントは、特定が困難な微妙な姓名ではある。

・Cornelis van Campen

van Campen だけではネーデルランドの南北の特定が出来ないが、Kampen でなく Campen であること、南北の人口比の割には現在のベルギーにも多い姓であること、Cornelis という綴りもフランドルのものであり、フランドル系の人物と判断しうる。

・Jacob Thomasz van Daelen

姓としての Thomas はフランドル的であるが、van Daelen は特定が困難である。

・Govert Dircxz

姓名のいずれもがフランドル的である。

・Symon Jansz Fortuyn

Fortuyn はオランダの姓である。他方、Jans や Symon はフランドルを示唆する。父は二度結婚し、それぞれ妻は Wiggertsdr Ramp と Gijsbertsdr という姓であり、特に後者はフランドルの姓である。本人の妻の姓が Pauwelsdr であり、出生地はフリースランドながらフランドル系の姓である。結局、オランダ姓の家系の割には、家系はフランドル的である。

・Albert（Elbert）Symonsz Jonckheyn

姓の語幹の Jonck はそもそもフランドルの姓であり、Symon(s) も同様である。彼は三度結婚し、それぞれ妻は Chijs、van Buyl、Coolen という姓であり、いずれもフランドルの姓である。その他、家系には Hem、Thymans、Lambrecht、Denen、Ysbrant、Claes 等々のフランドル姓が多く見られる。

・Petrus Plancius

言うまでもなく著名なフランドル人地図学者。元々は英・独で神学を学

んだオランダ改革派教会の牧師。ブリュッセル陥落後にアムステルダムへ移住。緯度決定の新方法を確立したり、海図にメルカトル図法を導入した。旧会社に 100 枚以上の地図を現物出資で提供した。

・Jan Hermansz van Reen

アムステルダム生まれで、Reen はフランドルの姓である。妻がフランドルの姓である Pouwels 家の出で、娘の夫の Gijsbert de Coningh からしてもフランドルのルーツが伺える。なお上記ジスベルトは、リーフデ号で日本にやってきて、仲間から「フレミング」と呼ばれていたミッデルブルフ出身のジスベルトと同姓同名である。

・Barthold Jansz van Steenhuysen

アルクマール生まれで、Steenhuizen と同一であるから van 以下の姓はオランダ式である。ただし母は Soutmans という姓で、父方の祖母は van der Gragt といい、どちらもフランドル系である。名の Barthold も、父の名前に由来する Jans も、姓として考えれば元々フランドルのものである。

以上、9 人のうち、特定しにくい二、三人ほど（van Bronckhorst、Fortuyn、van Daelen）を除き、先の遠国会社の 9 人と併せると、18 人中、少なくとも 15、6 人はフランドル系であると言えよう。

8. 新ブラバント会社　―アムステルダム商人のもう一つの源流

遠国会社の系譜の旧会社に新ブラバント会社が合流し、後に連合オランダ東インド会社 VOC に発展したのであるが、その新ブラバント会社は、以下の 6 人で立ち上げたものである。「ブラバント」と銘打つだけあって、全員がフランドル人（系）である。

・Bernaert Berewijns（アントワープ出身の有名な移住（emigré）商人）
・Hans Hunger（アントワープ出身の有名な移住商人）
・Isaac Le Maire（新ブラバント会社の設立者にして、VOC 最大の出資者、かつ後には VOC に反旗を翻して、大立ち回りを演じた伝説の人物である。）
・Gerald Reynst（アムステルダム生まれだが、典型的なフランドル姓で、

濃密なフランドルの血脈を有する第二代東インド会社バタヴィア総督）
・Jacques de Velaer（典型的なフランドル姓。名も然り。VOC アムステルダム・カーメルの 23 人の役員の一人）
・Marcus de Vogelaer（これも典型的なフランドル姓。名も然り。VOC アムステルダム・カーメルの 23 人の役員の一人）

その過程で最大の役割を果たしたのはイサック・ルメール（Isaac Le Maire）という人物で、彼はアムステルダムを拠点に 1599 年に自ら新ブラバント会社という先駆会社を立ち上げていた海外貿易の中心人物である。名前からも分かる通りユダヤ系の家系で、今のベルギー南部、フランス国境に近いトゥールネに 1558 年に生まれ、1585 年のアントワープ陥落により、その商売を携えてアムステルダムに移った。

父 Jacques Arnoutsz Aernouts le Maire、 母 Katharijne Pieters de Barrij との間に、5 人兄弟の一人として生まれ、母の姓 de Barij もフランドルの姓である。父も同じくトゥールネの生まれである。妻の姓は、Walraven というオランダの姓である。5 人の兄弟の配偶者の姓は、de Cocquiel、van de Walle、Arnouts、Damman であり、初めの三つは皆、明らかにフランドルの姓であり、最後の Damman もオランダよりフランドルに多くが存在する姓である。有名なヤコブやマキシミリアンを含む 11 人の子の配偶者の姓を見てみると、van der Niuwstadt、van Son、van Cleef、van Mierop、de Hooghe、van der Nieuwstadt であり、van Cleef 以外はフランドルの姓である。ルメール家は当然ながらフランドルの血縁が濃厚であるが、バイリンガルの家系であったのだろう、フランス語系の割には、オランダ語系との婚姻が多いことが特徴である。

22 人とも言われる子供たちの生き残った 11 人のなかの一人、アントワープ生まれのヤコブは、VOC の独占を崩すべく、ホーン岬航路を発見しジャワ航路を開拓したことで有名な探検家として歴史に名を残したし、アムステルダム生まれのマキシミリアンはまさに平戸商館をフランソワ・カロンから引き継ぎ、かつその出島移転後、最初の館長になった人物だ。何と、ポルトガル人追放（1639 年）からオランダ商館出島移転・隔離（1941 年）へと、日本が急速に鎖国に向かう激動の時代、もっとも重要な任務を担ったオランダ商館長の職責が、ともにフランドルにルーツを有し、母語としてはむしろフランス語を話す共通の家庭環境にあったであろ

うカロンからルメールへとバトンタッチされたということだ。まさにこの二人は、未だに議論の尽きない「鎖国はあったのか否か」という議論の鍵を握る人物なのであり、しかも彼らの尽力により、長い江戸の時代を通じてヨーロッパ勢としてはオランダのみが日本との貿易を許される基盤が築かれた(21)。

いずれにしても、1602 年に VOC へと発展統合するなかでその中核を成した連合アムステルダム会社の二つの源流である遠国会社と新ブラバント会社は、どちらも圧倒的にフランドルを人的・資金的基盤とする会社なのである。

9. ゼーラントのミッデルブルフ会社

上記のアムステルダム・グループのファン・オスやルメールと同様に、ゼーラント・グループの中心的な会社であるフェールス会社を 1597 年に立ち上げ、オランダの東インド航海の黎明期に大きな役割を果たしたバルタザール・ド・ムシュロン（Balthasar de Moucheron）という豪商も、名前からして、ユダヤ的かつフランドル系を思わせる。果たしてその家系のルーツはベルギーの言語境界線やフランス国境にほど近いムスクロンにあり（地名としては Moeskroen（蘭）、Mouscron（仏））、13 世紀ごろに一族はフランスのノルマンディーに移住した。その後、ユグノー戦争の過程で一部はネーデルラントへ出戻りで逃れ、ミッデルブルフとアントワープで事業を営んでいた。自らが中心で創業したフェール会社の運営方針を巡って対立し、出資した仲間の多くがミッデルブルフ会社に移った後、その両者が統合して連合ゼーラント東インド会社が 1600 年に出来たので、彼はそれを機にフェール会社を離れた後、改めて別途、自分自身の会社

(21) とりわけカロンは、平戸商館取壊しの幕府からの命を平戸藩邸で受け、まったく不満の素振りすら見せず、直ちに従ったことにより、準備万端整っていた実力行使によるオランダ追放への流れを断ち切った。イギリス人のアダムス（三浦按針）がオランダ商館設立（後のイギリス商館だけでなく）の際の立役者だとすれば、カロンはオランダ商館存続の立役者であったと言える。いよいよ鎖国に近づいていくこの間の幕府内の意思決定過程については下記に詳しい（山本博文、68 頁以下）。カロンについては、『日本大王国誌』（カロン原著・幸田成友訳注、東洋文庫 90、平凡社、1967 年）を参照。

ド・ムシュロン会社を立ち上げ直した。

こうしてミッデルブルフという移民フランドル人の牙城の町を擁するゼーラントにおいても、まずフェール会社が興され、デ・ハウトマンの船団が東インドに派遣されたわけだが、その会社の役員は以下の 6 人である。

・Hubrecht Brenten（姓については類推不能。Huibrecht ないし Huijbrecht と見なせば、名はフランドルの名）
・Pierre Lemoyne（姓名ともフランス語系であり、フランドルの姓）
・Cornelis Meunincx（姓だけでなく、名の Cornelis もフランドル的）
・Lieven de Moelenaer（姓だけでなく名の Lieven もフランドル的）
・Balthasar de Moucheron（VOC のワロン人大立役者）
・Simon Jaspersz Parduyn（Parduyns、Jasper ともフランドルの姓）

姓だけでは出身地域を全く類推できない Brenten も、名の Hubrecht がフランドルのものと見做され、6 人全員がフランドルにルーツを有すると考えることが出来る。VOC 設立の過程で、そのなかの二大グループであるアムステルダムとゼーラントの主要三会社が、どれもフランドル出身の三大巨頭の主導により生まれたということである。

10. リーフデ号を派遣したロッテルダム会社など

世紀の初めころには小さな町だったロッテルダムは、「16 世紀後半にアントワープから裕福な商人たちが戦乱から逃れて、この町に移住してきた。町の人口が爆発的に増加して、16 世紀末に一万人を超えた」（クレインス、46 頁）。二大グループからは引き離されているが、ロッテルダム・グループを代表する会社で、リーフデ号を含むマヒュー船団の派遣元でもあったロッテルダム会社も、ヨハン・ファンデル・フェーケン（Johan van der Veecken）とピーテル・ファンデル・ハーヘン（Pieter van der Hagen）という二人の人物が設立したものである。前者は、ブラバントのメッヘレン出身で、アントワープ陥落後、ロッテルダムに移った商人兼銀行家であり、後に VOC へは 60,000 ギルダーの大きな出資をしている。後者は来歴が不詳な人物であるが、アントワープで商売を営んでいた。なお上記リーフデ号は、後に徳川家康に重用されたイギリス人ウィリアム・ア

ダムス（三浦按針）が航海士を務め、1600 年に豊後に来航している。会社の役員に名を連ねたのは、以下の 6 人である。

・Johan van der Veecken, heer van Triangle（Veecken がフランドルの姓。孫の名を見ると、Jérome、Anne-Marie、Marie などがあり、フランス語常用の家系ということが窺える）
・Pieter van der Hagen（上述参照。生年・生地、血縁等、ほとんど知られていない）
・Balthasar Coymans（典型的なフランドル姓で、バルタザールという名はユダヤ系を示唆する。アントワープの有数で著名な豪商一家。アントワープ陥落後、ハンブルクを経てアムステルダムへ。母はイタリア人）
・Jacques L'Hermite（L'Hermite も別名 Le Clerq も典型的なフランドルの姓である。マテリーフ船団で東インドへ渡来、ジャカルタとの条約を締結、バタヴィアの基礎を作った）
・Isaac Le Maire（上記参照。姓名ともにユダヤ系を示唆する）
・Salomon Le Maire（上のイサックの弟）

コイマンスとレルミテがアントワープ、ルメール兄弟はトゥールネ出身であり、要するに会社設立に関わった全員がフランドル出身の著名な実業家たちである。しかも全員がユダヤ系と考えられる。こうなると、会社設立がフランドル人によって行われ、船団司令官が今のフレンチ・フランドル地方サントメール生まれのマヒュー司令官（そして同じくフランドル出身のデ・コルデス副司令官）となると、日本に来たリーフデ号は本当にオランダ船と考えてよいのかという疑念すら湧くだろう。会社の所在地や船籍という制度面では、まさに出来つつある国オランダであるかも知れないが、実態としてはフランドル人が出資して設立・経営する会社が、フランドル人であるマヒュー率いる船団のリーフデ号を日本に遣わしたようなものである。

同じくロッテルダム発の航海であるが、ユトレヒト生まれで、ロッテルダムのマゼラン海峡会社から派遣され、ネーデルラント人で初めて世界周航を実現したのはオリヴィエ・ファン・ノールト（Olivier van Noort）である。マゼラン海峡会社も簡単に会社の役員の姓だけを順に並べていくと、ファン・デル・ボイス（van der Buis）、ファン・ベフェレン（van

Beveren)、ベニンク（Benninck)、クーケバッケル（Coeckebacker)、クーケバッケル（同)、クラースゾーン（Claesz）となり、また 4 隻からなる船団の船長など主要メンバーを見ると、クラースゾーン（同上)、ハイドコーペル（Huydecooper)、デリント（de Lint)、ビースマン（Biesman）といずれも極めてフランドル的な姓がずらりと並んでおり、当然、司令官のファン・ノールトも同様であろう（後述参照)。ロッテルダムを起点にした二つの会社による海洋貿易はこうしてフランドル系に席巻されている印象がある。

11. VOC 発足後　総本山のアムステルダム・カーメル

さて上でハウトマンをリスボンなどに派遣したのは 9 人のアムステルダムの商人と書いたが、VOC 発足時には、その 9 人を含む旧会社の 18 人、新ブラバント会社の 6 人のうちの多くを含む計 23 人が集まり、VOC の圧倒的な中核となるアムステルダム・カーメルが発足した。

VOC への最低限の出資額は 3000 ギルダーであり、アムステルダムでは 1143 人もの出資者がいたが、そのうちドイツ人が 39 人、フランドル人に至っては何と 300 人を下らなかったし、大口の出資者の上位 8 人のうち 6 人までがフランドル出身であった。しかもそのなかで 85,000 ギルダーという最大の出資額を拠出したのは上記のイサック・ルメールであった。株主数で四分の一以上を占めた上に、VOC 最大の株主を含め、三人の大物株主を抱えるフランドル出身者の VOC への影響力が如何ほどのものか、当時のアムステルダムやミッデルブルフ、ロッテルダムなどにフランドル出身者が溢れていたという事実とも相まって、容易に想像できるであろう。

その遠国会社、旧会社、新ブラバント会社の 17 人を除く、アムステルダム・カーメルの新出メンバーの名前を別途、下記にまとめる（フッデの後継であるビッカーを記載したので、計 24 人で、ここでは 7 人)。順番は特許状における順番に従った。

・Gerrit Pietersz Bicker　1554 年アムステルダム生まれであり、遠国会社以降における長老 Hudde の後継者で、Bicker の名前は両ネーデルラントの姓。ビッケル家もホラントの名門で長らくアムステルダム市政を

司った。家系にはデ・フルッド（de Vroede）やコッド（Codde）、ノームス（Nooms）やブーリンス（Boelens）というフランドルの姓が多く見られる。

・Louis de la Becue　完全にフランス語系のフランドル商人（Becue もフランドル姓）。
・François van Hove　Van Hove はネーデルランドの南北にある姓であるが、フランドルに圧倒的に数が多く、François という名も考慮すると、フランドルがルーツと思われる。
・Elbert Lucasse　この姓は Lucas と考えると、欧州に広範に広がる姓であり、特にフランスに多く、オランダとフランドルにはほぼ同程度存在するので、（人口比等からしても）よりフランドル的な姓と考え得るが、確定は困難。
・Geurt Dircksz　姓名ともネーデルランドの南北にある名前であり特定は困難である。ただし Dirck はよりフランドルに多く存在し、名の Geurt は Gerard に由来し、きわめてフランス・フランドル的であるから、全体としてもよりフランドル的であると考え得る。
・Huybrecht Wachtmans　名がフランドル式で、姓はフランドルの Wachsmann か。
・Lenart Ray　姓がユダヤ的でフランドルのものである。

結局、アムステルダム・カーメルを構成した 24 人の内の、上記新出の 7 人について、家系が不確かで、フランドル系の可能性が高いが、確定はしにくいのが Lucasse、Dircksz の二人ということになる。先に 9 人の遠国会社設立当事者等も全員がフランドルと関係を有すると結論付けたので、合計すると 24 人のうち何と 22 人がフランドル系の人物ということになる（出自が特定不能な旧会社の Fortuyn 、van Daelen は、カーメルには含まれない）。結局、VOC の活動を主導するアムステルダム・カーメルのメンバーのうち、十分可能性のある二人を含めてほぼ全員が、フランドルをルーツとする人々たちということになる。

12. 権限絶大なる船団司令官の出自

さて以上は本国において東インド貿易の統治機構を担った人々の分析で

あったが、今度はその付託を受けて、実際にどのような人々が海に乗り出し海外進出したのかを見ていこう。具体的には先駆会社を含めた VOC による船団派遣の際の司令官を見てみると、ここでもフランドル出身者の活躍が目立つ。当時は、まさに冒険であり、大きな賭けである船団派遣において、当然ながら船主は絶対的な信頼が置ける人物でないと司令官には任命しなかっただろう。その際、今のような企業組織化・情報化時代では無いので、地縁血縁が決定的に重要視されたとしても全く不思議ではない。

先駆会社時代から VOC の第六船団のボット司令官（そのまま現地に居残り、初代総督に）に至るまでの司令官（及び副官）を下記に列挙して概観してみよう。

先駆会社時代

遠国会社

Cornelis de Houtman　既述

Gerrit van Beuningen　ドイツ生まれだが、フランドル姓

ミッデブルフ会社

Gerald Le Roy　ルロワはフランドル姓である

Laurens Bicker　ビッケル家については既述

フェール会社

Cornelis de Houtman　既述

Guyon le Fort　姓名ともフランドルのもの

旧会社

Jacob van Neck　後述参照

Wybrand van Warwijck　姓・名ともフランドルのもの

ロッテルダム（Veecken & Hagen）会社

Jacques Mahu　既述。フレンチ・フランドル（サントメール）出身

Simon de Cordes　既述。アントワープ出身

マゼラン海峡会社

Olivier van Noort　後述参照

Jacob Claesz　クラースは典型的なフランドル姓

旧会社

Steven van der Hagen　既述

旧会社

Jacob Wilckens　ウィルケンスは典型的なフランドル姓
新ブラバント会社
Pieter Both　後述参照
Paulus van Caerden　典型的なフランドル姓
旧会社
Jacob van Neck　後述参照
Cornelis van Foreest　姓・名とも典型的なフランドルの名前
新ブラバント会社
Guillaume Senescal　姓・名とも典型的なフランドルの名前（仏語 Senéchal 家令の意）
連合ゼーラント会社
Gerald le Roy　上述参照
Laurens Bicker　上述参照
旧会社
Wolfert Harmensz　姓名ともユダヤ・ゲルマン的な姓と思われ、姓は Herman から派生したものと思われる。今ではオランダに多い姓ではあるが、姓だけからは特定困難
連合アムステルダム会社
Jacob van Heemskerk　後述参照
ド・ムシュロン会社
Joris van Spilbergen　姓・名とも典型的なフランドル姓

VOC 成立以降

第一次航海
Wybrand van Warwijck　上述参照
Sebald de Weert　アントワープ出身。かつて上記マヒュー船団にも参加。
第二次航海
Steven van der Hagen　上述参照
Cornelis Bastiaensz.　姓・名とも典型的なフランドルの名前
第三次航海
Cornelis Matelieff, de jonge　後述参照
Olivier de Vivier　フランドルの姓である

第四次航海

Paulus van Caerden　上述参照

Adriaen Maertsz.　フランドルの姓である

第五次航海

Pieter Willemsz. Verhoeff　姓からは特定困難だが、父・本人の名はフランドル的

François Wittert　オランダにさえ 6 家族しかいない珍しい姓であり、姓だけからは判別困難だが、名はフランドル系を示唆。ちなみに幕府がオランダに対して初めて発給した朱印状がこの名前で出されている。

第六次航海

Pieter Both、上述参照。東インドへの航海後、そのまま初代東インド会社総督に就任

以上 35 代の司令官および副官のうち、姓からはフランドル系と特定できないのは三名のみである（Harmensz.、Verhoeff、Wittert）。ただしこの三名も、後二者については、Pieter、Willem、François の名前からもフランドル系の可能性が高いと思われる。以上から、唯一特定が困難な Harmensz. の例外を除き、船団の正副司令官もほぼ全員がフランドル系の可能性があり、フランドル系の幹部が司令官の任命権をしっかり保持していた事情が浮かび上がる。

13. 幾人かの有名な船団司令官の事例

船団司令官として有名な人物のなかには、名前からだけではその出自の判断がつかない人物が多い。その典型的な例として、ハウトマンの後を受けて、旧会社から派遣され、商業的に初のアジア航海に成功したファン・ネック（Jacob Cornelisz van Neck）がいる。彼は、生まれはアムステルダムであり、姓としての Neck 自体は南のものだが、Van Neck となると北のものされるので、この司令官もオランダの家系かというと、必ずしもそうではない。

ファン・ネックは Cornelis Barendsz と Weyn Pietersdr van Neck の間に生まれた。判断の難しい境遇であり、父の Barend 姓は南北共通の姓であるが、Cornelis はきわめてフランドル的である。エンクハイゼン生まれ

の父 Cornelis は、Barend Albertsz と Wijburch Willem Heyneszoondr の息子であり、Heyne はネーデルラントの他、ドイツにも多く見られ、Willem もフランドルを示唆し、さらにオランダでは見られない Albert は、フランドルの姓の可能性を高める。祖父 Barend も、エンクハイゼンの生まれで、Albert Fredericksz の息子である。この曾祖父 Albert は、生地・生年が不明となり、その名前は、姓名ともフランドルのものである可能性がある。

母 Weyn は、Pieter Pietersz van Neck, de oude と Weyn Jansdr Oom, de oude の娘であり、祖父の姓 Pieters はむしろフランドルのものである。母方の Oom、Jans はフランドルの姓であり、名の Weyn すら姓とするならフランドルのものである。その名前から判断して、一般にはオランダ人として何の疑念も抱かれないであろうファン・ネックであるが、子細に検討すると、家系にフランドルの濃い血筋が脈々と流れていることが判明する。

同様のことは、ユトレヒト生まれで、マゼラン海峡会社から派遣され、ネーデルラント人で初めて世界周航を実現したオリヴィエ・ファン・ノールト（Olivier van Noort）についても言える。そもそも van Noort という姓はフランドルのものとされる（オランダでは van Noord）。ちなみにルーベンスの師匠である同時代のアダム・ファン・ノールトという著名な画家がアントワープ出身でもあり（父ランベルトもユトレヒト生まれの画家でアントワープで活躍）、またピーテル・ファン・ノールトというライデン生まれの画家もフランドル系と思われる。シャルルマーニュ時代を歌い上げた叙事詩『ロランの歌』に由来する「オリヴィエ」というフランス語式の名前とも相まって、彼のルーツはフランドルであろう。しかも 4 隻からなる船団の船長など主要メンバーの姓（Claesz、Huydecooper、de Lint、Biesman）などを見ると、極めてフランドル的な姓が並んでおり、従って司令官のファン・ノールトも当然、同様であろう。後述の通り、日本に三浦按針のリーフデ号を派遣したファン・デル・ハーヘンの会社を含め、こうしてフランドル移住民によって発展した町ロッテルダムの二つの会社は、どちらも圧倒的にフランドル系の資本と人材で構成されているということができる。

さて連合アムステルダム会社の船団にヤコブ・ファン・ヘームスケルク（Jacob van Heemskerck）という司令官がいる。父 Hendrik Cornelisz

van Beest van Heemskerck はデルフトの生まれだが、祖父 Cornelis の姓を継承しており、Beest と Hermskerck も含めてフランドル的である。母はアムステルダム生まれであり、フェルマース（Vermaas）というフランドルの姓の家系である。父方の祖母は、Maria van der Meer という名で、van der Meer はオランダの姓である。もっとも仮にこれが短縮形の同じ名前である Vermeer であれば、有名な画家フェルメールと同姓となる(22)。曾祖父の Dirck の妻は、Geertruid van Diemen であり、彼女は、Vranck Vranckensz van Diemen と Margareta Huygensdr Busscharts の間の娘であり、Vranck といい、Huygen といい、Busscharts といい、フランドルの姓の両親の下に生まれている。少なくとも 3 代前から父親方にフランドルの血が流れている。

なおファン・ヘームスケルクという姓に関しては、北ホラント州の沿海の地名であるが、人名の場合、フランドルでも見られる姓となる。メールテン・ファン・ヘームスケルクというロマニスト派の画家もいるが、何と言っても本件のヤコブ・ファン・ヘームスケルクが有名である。アジアへの北東航路を探してバレンツとともに北極探検を行い、東インド会社の前身会社の航海で東インドに来航、活躍し、さらに海軍最高司令官としてジブラルタル沖でのスペインとの海戦に勝利した、探検家・提督・軍人として伝説の人物である。今でもオランダ海軍の艦船にその名が付けられている。あのグロティウスが有名な『海洋自由論』を著すよりも先に、初めて論陣を張ったのも、このヤコブ・ファン・ヘームスケルクが東インドのジョホールでポルトガル船サンタ・カタリナ号を捕獲した行為を正当化すべく弁護したものなのである。

ここで付言するに、そのオランダの海洋進出を法理論的に正当化するのに貢献大だった、オランダが誇る国際法学者グロティウス（Hugo Grotius）も、そのルーツはフランドルである。デルフト生まれで、父親も学んだライデン大学に 11 歳で入学したという神童である。カルヴァン派内の論争に敗れ、終身刑から脱獄後は、フランスで大半の人生を過ごしたが、「国際法の父」としてあまりにも有名である。フーゴー・グロティウ

(22)　画家のフェルメールは、そもそも祖父がアントワープ出身でユダヤ系かつフランドル系である。ファン・ゴッホなどは当時、有名な「手紙」のなかで、フェルメールをオランダ式に「ファン・デル・メール」と呼んでいる。元々はユダヤ姓でもあるフォス（Vos、英語では Fox）を改姓したものである。

ス（本名ホイフ・デ・フロート）という名前であるが、デ・フロート（de Groot）という姓がフランドル由来とされ、しかもラテン名のグロティウスという姓はベルギーに現存する姓でもある。元々、デ・フロートという姓は、「偉大な」という意味のルグラン（Le Grand）という語が姓に付加され、それが後に姓そのものに変化したものである。父親の名のコルネッツ（Cornets）などがフランドル式であり、さらに遡るほどにフランス語系の名前が増えてくる（François Jean de Coronet 等々。そもそも元々の姓 de Coronet がフランドル姓）。また母のボーレン姓も（Aeltgen Fransdr Borren van Overschie）、Frans、Borren、Overschie 等がフランドルを示唆し、先祖を辿っていくと、フランドルを示す姓が数多く出てくる他（Meeuse、van Dorp、van Vliet、Coorn、Cors 等々）、さらに遡るとフランドル伯、ホラント伯、ザクセン公等に連なる華麗な家系である。ラテン系の父方とゲルマン系の母方の血統が混ざり合った、まさに重厚な名門家系であるが、またそのことが先述の脱獄後のフランス亡命の伏線でもあろう[23]。

最後に VOC になってからの船団の司令官として活躍したコルネリス・コルネリスゾーン・マテリーフ（Cornelis Cornelisz Matelieff, de jonge、子）という司令官に触れておこう。彼には、まったく同姓同名の父親（de oude）がいた。父親は生年・生地など不明だが、子の方はロッテルダム生まれである。父親には兄弟が二人いて、弟のクラース（Claes）は、その名がそもそもフランドル的である。姉妹のマリトヘ・コルネリスドル・マテリーフ（Maritge）は、初めに、その姓名からフランドルの出自と思われるニコラス・メールテンスゾーン・ファン・ホーフストラーテン（Nicolaes Maertensz van Hoechstraten）に嫁ぎ、後にヤコブ・ヤンスゾーン・クワケルナック（Quaeckernaeck）と再婚している。後者のクワケルナックとは、1600 年に豊後に到着したリーフデ号の船長である（上

(23) オランダ人とはいえ、グロティウスは当然、フランス語話者でもあったろう。フランス留学を経験しているわけではないが、ライデン大学卒業の翌年、わずか 15 歳でオランダ使節の一員としてフランスを訪問、アンリ 4 世にも謁見して激賞を受けていることがその証拠となろう。後年、フランスにおいて駐仏スウェーデン大使の役目も果たした。なおこのスウェーデン大使の任務も、本稿で述べたオランダ・スウェーデン間の政治的蜜月を背景としたものであることは言うまでもない。脚注 19 参照。

述参照)。付言すると、そのクワケルナックは、徳川家康への三浦按針の嘆願により帰国を許され、平戸より出国、バタヴィア経由で帰国の予定で、途中、帰任を控えたマテリーフ司令官（妻の甥）の船団に合流したが、ポルトガル人との交戦であっけなく戦死してしまった(24)。

さてマテリーフ（子）は、父とその後妻であるアフィエ・クラースドル・ファンデルホルスト（Aefje Claesdr van der Horst）の間に生まれている。マテリーフ（子）の妻は Anna van Juchteren という。姓の根幹部分 Juchter は、フランドルの名前と思われる。マテリーフ（子）夫婦に子供はいない。一人の弟クラース、二人の姉妹アフィエとマリアがおり、姉のアフィエは、コルネリス・アンドリースゾーン・コーニンク（Conninck）夫人となり、その姓から夫は明らかにフランドル人と思われる。アフィエの娘の一人のエリザベート・コルネリスドル・コーニンクは、エリザベートという名もさることながら、ピーテル・ルス（Lus）と結婚、こちらもその姓からフランドル人の夫と思われる。妹マリアはヤン・ヤコブスゾーン・ムーシュ（Jan Jacobsz Musch）と結婚している。Musch は、南北ネーデルラント等に見られる姓であり、こちらは姓からだけでは地域の特定は出来ない。ただし妹夫妻の子供たちの配偶者の姓を見てゆくと、de Casembroot, van Yck, Cats, van Goedereede, Crijger などという完全なフランドル姓になっている。

また父ヤンの前妻は、ハイルトヘン・アドリアンス・カム（Heijltgen Adriaens Cam）であり、カムと言う姓がフランドルのものである。5 人の子のうち娘マリトヘン（Maritgen）は、日本での江戸参府日誌で有名なニコラス・コルネリスゾーン・ポイク（Puyck）に嫁いでいるが、後述する通り、ポイクという姓がそもそもフランドル姓である。以上、総じてマテリーフ家もフランドル系の家系であると断じることが出来よう。

以上までで明らかになったのは、VOC 投資者の信任を受けて会社の運営を行う本国の上級運営者だけでなく、船団司令官・船長として実際に海に乗り出していった人々にも圧倒的にフランドル系人材が多いという事実である。むしろ以上の研究調査結果からは、それほど上手くフランドル人（系）ばかりが集まるものだろうかと疑問すら感じる向きもあろう。しかし繰り返すことになるが、当時は「独占」こそが「規範」なのであり、仮

(24)　脚注 16 も参照。

にフランドル系オランダ人以外が登用されるとしたら、例えば生粋のドイツ人であるシーボルトの例に見られるように、逆にそれこそが調査に値する稀な例外事例となるということである。

後編では、本国オランダから雄飛し、日本も含めて海外に常駐してオランダ大航海時代を担った人々、とりわけバタヴィア総督及び長崎における商館長を中心に焦点を当てていき、前編で明らかになった「フランドル人（系）が担ったVOC」という事実が海外でも該当するか否かを確かめてみたい。

（以下続く）

参考文献

栗原福也『ベネルクス現代史』、山川出版社、1983年
金井圓『日蘭交渉史の研究』思文閣出版、1986年
科野隆蔵『オランダ東インド会社の歴史』、同文館、1988年
加藤榮一『幕藩制国家の形成と外国貿易』、校倉書房、1993年
山本博文『鎖国と海禁の時代』校倉書房、1995年
永積昭『オランダ東インド会社』講談社学術文庫、2000年
羽田正『東インド会社とアジアの海』講談社学術文庫、2017年
浅田實『東インド会社』講談社現代新書、1989年
中澤勝三『アントウェルペン　国際商業の世界』同文館出版、1993年
小岸昭『マラーノの系譜』みすず書房、1994年
大木英夫『ピューリタン　近代化の精神構造』聖学院大学出版会、2006年
森良和『リーフデ号の人々』学文社、2014年（森『リーフデ号』と略称）
森良和『三浦按針　その生涯と時代』東京堂出版、2020年（森『三浦按針』と略称）
森良和・F. クレインス・小川秀樹『三浦按針の謎に迫る』玉川大学出版部、2022年（森・クレインス・小川『三浦按針』と略称）
高橋裕史『武器・十字架と戦国日本』洋泉社、2012年
レオス・ミュラー『近世スウェーデンの貿易と商人』（玉木俊明・根本聡・入江幸二訳）、嵯峨野書院、2006年（ミュラー『スウェーデン貿易』と略称）
B. ベイリン『アトランティック・ヒストリー』和田光弘・森丈夫訳、名古屋大学出版会、2007年
小川秀樹編著『ベルギーを知るための52章』明石エリアスタディーズ71、2009年
B. C. ドナルドソン『オランダ語誌』（石川光庸・河崎靖共訳）現代書館、1999年
岡崎久彦『繁栄と衰退と』文春文庫、1999年
ジョルジュ＝アンリ・デュモン『ベルギー史』（村上直久訳）白水社文庫クセジュ、1997年
モーリス・ブロール『オランダ史』（西村六郎訳）白水社文庫クセジュ、1994年

エミール＝G・レオナール『プロテスタントの歴史』（渡辺信夫訳）、白水社文庫クセジュ、1968 年

Boxer, Charles R., *Dutch Merchants and Mariners in Asia, 1602–1795*, Variorum Reprints, London, 1988

van Lottum, Jelle, *Sailors,national and international labour markets and national identity, 1600–1850* (cited as Lottum, "Sailors")
(https://www.academia.edu/24429578/Sailors_national_and_international_labour_markets_and_national_identity_1600_1850